

さがしもの

は

なんですか

チバユキ

「ほら、また来てる。」

高校を中退した女の子、早瀬きい（はやせきい）が1枚の紙を、浪人を5回した拳句大学を諦め、今現在はゲーマーな田中裕（たなかゆう）に渡した。

「何を探せって？」

田中はその紙を受け取らず、ゲームを続けた。

「んーと…、指輪。」

「はあ？指輪？」

「うん。結婚指輪。」

「なんで無くすんだよ。」

「別れ話を切り出されたから腹が立って捨てたけど、何週間かしてやりなおそうってなったから探してほしい、と書いてある。一応。」

「…そいつ、勢いで動きすぎじゃねーか。」

「人間そんなもんだよ。」

「は？」

「あたしだって、勢いで高校やめたし。」

「じゃあ今は後悔してんのか。」

「いや、精々してる。」

「…依頼人の勢いとお前の勢い、ちょっとばかし違うかもな。」

「…そう？」

「うん。」

ここ、スカイ探偵事務所は探偵事務所だが、ただの便利屋として扱われていた。ちなみに、事務所名の由来は東京スカイツリーが建設され始めた頃にこの事務所も建てられたため。たが、実際はこの事務所からスカイツリーまでの距離は電車で、およそ1時間はかかる。名前だけ。まさに、勢いでつけた事務所名である。

「でー？」

田中はいつの間にかゲームをやめていた。

「何が、でー？なの。」

「どこで捨てた？…川、とか言わないよな。」

「お、さすがですね。川に捨てたそうですよ。」

田中はやる気失せた、と嘆いて床に寝転がった。

「裕さん、風邪引きますよ。」

「別に俺が風邪引いたって誰も困んねえよ。」

「…確かに。」

「おいそこ否定しろよ。」

「いや、何で？」

「何でって！」

寂しいじゃん…と、今にも消えそうな声で田中は呟いた。

「よし。」

田中は、意を決したように立ち上がった。

「もしかして、探しに行くぞ、とか言っちゃいます？」

「来るもの拒まず。…それが俺の…、俺の…」

「座右の銘？」

「そ、それだ！座右の銘だ！」

そう言うと、田中は木で出来たボロボロドアを開けて外に出た。

早瀬も「しょうがないか」と呟いて、ドアを開けた。

外の様子はいつも通りに、奥様たちがスーパーの前で井戸端会議をしていて、町には丁度、14：00を知らせるアナウンスが響いていた。

ずずめの死骸が道に落ちていた。早瀬は嫌な予感がした。

「おい、きい。」

「はい？」

「どこの川？」

「駅の近くです。」

駅の近くには細い川が流れている。名前は、大崎川。ちなみにとにかく汚いで有名な川。

ここから歩きで4、5分。川の音が聞こえてきた。

「おっしゃ、きい。」

「なんでしょう、裕さん。」

「探すぞ。」

早瀬は嫌そうな声で「はい」と答えた。

日は長くなってきたとは言え、夏ほどではない。ゆえに18：00ぐらいには暗くなってくる。早く見つけよう、と言いつつまったく見つからない。早瀬の口から、始めは、がんばります、早く帰りましょう、と気合が入っていたのに今は、帰りたい、マジ無い、この川きたねえ、とかいう文句しか出てこなくなった。

「あれ。」

さっきまで忙しく動いていた田中の動きが止まった。

「どうしたんすか。見つかりましたか。」

「違う。」

「は？」

「……ひとがいる」

「ひとがいる？ ひとがえる？」

「か、かえるじゃなくて、人！」

「は？人？…意味わかんないっすよ。」

「俺も、わかんないよ。」

ふたりで協力して、川辺まで運んだ。当たり前かもしれないけど、もう息は止まっていた。年齢は40歳くらいのどこにでもいるような、情けない雰囲気な男性。

「警察に連絡しますか。」

「するに決まってるだろ。」

「そうっすよね。」

「…ああ。」

田中は頷いて、ポッケからケータイ（防水の）を取り出した。

「…裕さん。」

「…ん？」

「警察って凄いですね。」

今、早瀬と田中の周りには沢山の警察官と刑事がいる。

警察によると、水死体は飯塚雄二、43歳。先日、会社をクビになったらしい。勢いの自殺だろうというのが、警察の考えだった。

「勢い…。」

「どうした、きい。」

「勢いって、勢い？」

「そうだよ…。それがどうかした？」

「うちの依頼人にも勢いでやった、とか言う人いませんでしたか？」

「居た。…だが、それがどうかしたか？」

「これも、勢いで自殺…。」

「だから、それがどうかしたのかって！」

「裕さん。勢いの依頼人の苗字も、飯塚でした！」

「はあ？それがどうした！たまたま一緒っていうのも有り得るだろ！」

「いやいや！この辺は、飯塚っていう苗字少ないんですよ！」

「なんで分かるんだよ！」

「一応、探偵ですから！…そんなことも分らないんですか、裕さんっ！」

早瀬は語尾にハートマークをつけた。田中は悔しそうな顔をして、悔しいですっ！と叫んだのであった。

チャイムの間延びした音が響くかと思えば、案外ピンポッ、という短い音で終わった。

「…いい家の証だな。」

そう呟いたのは田中だった。

お洒落なドアが開いて顔を出したのは、気品漂う女性。飯塚陽子、39歳。

「飯塚さん、夜分に失礼します。スカイ探偵事務所の早瀬と」

「田中、と申します。」

「この度は、ご依頼ありがとうございました。あの、少しお話が…」

そう言うと、陽子は「立ち話もなんなので中に入ってください。」と言った。

声も、容姿に負けないぐらい美しかった。

どうぞ、と言われて出された高そうなティーカップには、キラキラ輝く液体が入っていた。恐らく、アップルティーかなんかだろう。田中と早瀬は、その液体を不思議そうに見つめる。彼らにとっては、そのキラキラ輝く液体を見ることは、宇宙人との遭遇と同じである。

「失礼ながら、これは…？」

遠慮がちに田中は聞いた。早瀬も隣で興味深そうに、陽子の顔を見た。

「あ、これは、アップルティーです。とても美味しいんですよ。どうぞ、ご遠慮なく。」

ご遠慮なく、を言い終わるか終わらないかという瞬間に、田中と早瀬は一緒に飲みだした。そして、同時に「うまい！」と叫んだ。その言葉が嬉しかったのか、陽子は嬉しそうに微笑んだ。

「で、用件というのは？」

あっやばい、と早瀬が呟く。アップルティーに気を取られていた。（そんなに珍しいものではないのに）

「すみません、指輪が見つからなくて…」

「ああ…やっぱりそうですか…。無理な依頼をして申し訳ありません。」

「いえいえっ、そんなっ！…わたし達の力不足です。でも、変わったものが見つかりまして。」

「変わった…もの？」

「もの、というかひと、ですね。飯塚雄二、という男は知りませんか？」

普通はここで、カッコよく顔写真とかを出すのだろうけど、生憎写真なんか持っているはずもない。早瀬は思い立ったら即行動！準備なんかどうでもいい！という、変な名言を残すような人

だからだ。本当にかっこ悪い。（本人は気づいてない）

「わ、私の旦那……です……。」

陽子は、旦那がどうかしましたか、と不安そうな声で訪ねた。

「水死体で見つかったんです。」

早瀬がそう言うと、陽子は崩れ落ちた。綺麗な顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。

ふたりは陽子を落ち着かせてから、陽子の家を出た。

ドアが閉まった。家に再び、静寂が訪れた。

これで私は刑務所に行けるのかしら。

ずっと望んでいたあの場所に。

そしてずっと好きだったあの人に

会えるのかしら……—

「もー、裕さあーん！」

「なんだよ。」

「あの、飯塚陽子って人むっちゃ綺麗じゃないすか！」

事務所に戻ってきてから、早瀬はこれしか言わない。田中は、またそれか、と思いながらも「そうだな。」と頷いた。

「推理小説とかだと、綺麗な人が犯人っていうやつ多いですよね！」

「ああ、多いな。」

「2時間ドラマは、だいたいイケメンが犯人ですけどっ。」

「そうだな。」

「…というわけで、容姿端麗な人が犯人になる可能性が高い！」

「へー。」

「飯塚雄二を殺したのは、飯塚陽子だっ！！」

ホワイトボードに書いてあった飯塚雄二に罰印をつけて、飯塚陽子から雄二に矢印を引いた。

「おいおい、待て待て。」

「はい？何か問題でも。」

可愛く首をかしげる。（早瀬がやるとキモイが。）

「問題も何も、飯塚雄二は殺されたかなんてまだ分かんないじゃないか！警察だって、『勢いで自殺だろう』とか言ってたじゃんかよ！！」

「あれは殺しですよ。絶対。」

「絶対？」

「ええ、絶対。」

「違ったら何する？」

「全力で尻文字します。」

「本気(マジ)か？」

「ええ。私はいつでも本気(マジ)です。」

早瀬はテレビをつけて、今日遭った事件についてのニュースを読んでいる番組を探した。あるチャンネルが丁度、その事件について報道していた。

『本日未明、〇〇県XX市を通る大崎川で水死体が発見されました。この水死体は何者かに首をしめられ、』

早瀬はドヤ顔をした。田中は土下座をした。

その頃、陽子もそのチャンネルを見ていた。

やっと殺人と気づいてくれた。きっと警察は私をすぐに疑うだろう。
そしたら、刑務所の中の大山さんと出会えるんだわ。

期待に胸を膨らませる。

でも、それと同時に不安もうまれてきた。

もし、大山さんが私のことを忘れていたら...？

この計画は水の泡になってしまうわ。ただの悪人になるだけだわ。

そう思えば、目頭が熱くなって、涙がこぼれてきた。その涙が床に落ちると同時に、チャイムが鳴った。

「警察なんだが」

「...どうされましたか？」

「事情聴取させてもらっていいですか。」

「ええ。怪しくなんてないですから。」

「うわっ」

早瀬がふと眩しさで起きると、目の前には田中の顔があった。

「きもちわるう～」

田中をぐーっと押して離れる。

昨日は確か、あのニュースを見て徹底的に陽子について調べたんだっけな。

そしてわかったことは、陽子の好きな人...まあ、いわゆる本命の人大山さんって人は刑務所に入って現在服役なう。そいつに会うために犯行に及んだと思われる。ちなみに本命といっても、浮気だったらしいけど。

浮気ウワキウわき.....

早瀬の頭の中では小さいころの忘れたはずの記憶が蘇ってきた。ー

平和な日曜日の昼下がり。
お父さんは、今日も仕事。
最近ずっと仕事ばかり。
私もお母さんも、
お父さんの姿を全く見かけなくなった。

だからお母さんはお父さんの代わりもしてくれた。
たくさんいろんなところに連れて行ってくれた。

今日は遊園地に来た。
熊さんに風船をもらった。
私の好きなピンク色の。

私は嬉しかったから、はしゃいでいた。
でもお母さんはどこか一点を見つめてる。
「...お母さん？」
「.....」
「お母さんっ？.....?!」

お母さんが泣いてる。

そして、ぼそっと「浮気してたのね」とつぶやいていたのを私は聞き逃さなかった。
それからお母さんは、鬼になった。
私は何もしていないのにいっぱい私を叩いたり、殴ったりした。
時には、包丁を向けられることもあった。
でもそんなことをしたあとには、「ごめんね」って優しく抱きしめてくれるから許しちゃって
いた。

しばらくして、お父さんの仕事が落ち着いて家でみんな仲よく過ごす時間が増えた。

それから時間がたって、私が中学生になったころ。

「うわあああっ！！」

田中は奇声に驚いて目を開いた。

目の前には、頭を抱えて悶えてる早瀬の姿。

「きいっ?!きいっ?!」

田中は早瀬を抱きしめて、必死に止めようとする。ずっと名前を呼び続ける。

しばらくすれば、早瀬は落ち着いて、「ごめんなさい」とつぶやいた。

「きい。」

「なんですか。」

「なんですか、って。...落ち着いたか？」

「はい。すいません。」

「なんかあったのか？」

「別に、裕さんには関係ありませんから。」

「...そうか。」

それから1週間経った日。

ふたりは陽子の家の前にいた。

陽子はまだ逮捕されていない。むしろ、疑われていない。

おかしいとは思うが。

家のチャイムを鳴らせば、陽子は快く家の中に通してくれた。

この間のようにお茶は出してくれなかった。まるで、このあとの展開がわかっているかのように。

「陽子さん。」

「はい」

「あなたは、飯塚雄二さんを、殺しませんでしたか？」

「...」

「黙秘権ですかい」

「...いえ、そんなつもりは。」

「じゃあ何か言ってください。」

「...」

「また黙秘権ですかい」

「今、言おうとしたんです」

「あ、そうすか。さーせんした」

陽子は、ゆっくり口を開いた。早瀬が推測した通りだった。

彼女は大山さんに会いたいがために、犯罪を犯した。陽子は最後に、「ありがとう」とふたりの目を見て言った。その時の目は、本当に優しくて柔らかかった。一

「裕さあーん」

「ああ？」

「あんな優しそうな人でも殺人とかしちゃうんですねー」

「まあ、人は見かけでは判断できないからな。」

ふたりは事務所に戻って、いつものようにノンビリしていた。

「そういえば、裕さんってなんで探偵になったんすかー？」

「えー？...親父を探すため。」

「親父？」

「ああ。...俺が物心ついたときにはもう居なくなってたんだ。しかも、親父のことを聞けば、母親からどつかれた。」

「へー...」

「なんか、抹殺されてんだよ。俺の親父。いないことになってる。」

「へー...」

「.....興味ない？」

「ない、ですね...」

「なんで聞いたんだよ。ばかやろ。」

「さーせん。」

「お前は...？どうなんだよ。」